

「放蕩息子のたとえ」(ルカ15:11~32) は現代において有効か?

—解釈をめぐる問いについて—

澤 村 雅 史

(2011年11月11日受理)

Is the parable of 'Prodigal son' (Luke 15 : 11-32)

Still valid in the modern world ?

— An exegetical inquiry —

Masashi SAWAMURA

1. 問いの出発点

新約聖書・ルカによる福音書15章11～32節には、「放蕩息子のたとえ」として知られるたとえ話が記されている。神から離反している人間の悔い改めと、人があるがままに受け入れる神の広い愛が会おう物語として、まさに「福音中の福音」(Evangelium in Evangelio)¹⁾として愛されてきた挿話である。

筆者が今年度、この挿話を本学初年度必修科目である「キリスト教学入門」の授業内で聖書の思想を表す代表的な箇所のひとつとして紹介したところ、学生たちから興味深い反応があった。学生たちは放蕩息子およびそれを受け入れる父のふるまいに共感せず、むしろ批判的であり、物語内では克服されるべき姿勢として批判的に提示されているはずの兄息子の言い分にもっとも共感を覚えるというのである。聖書をひもとく場合に一般的とされている解釈²⁾と、学生たちの解釈との間に、このように大きな乖離が生じるのはなぜであろうか。

2. テキスト (私訳)

そして彼(イエス)は言った。

「ある人に二人の息子があった。弟息子がその父に言った。『父よ、財産のうち私に来る分け前を下さい。』そこで彼(父)は彼ら(息子たち)に財産を与えた。何日もたないうちに弟息子は全てを換金し、遠く離れた地へ旅立ち、そこでの放縦な暮らしですべての財産を浪費した。彼がすべてを使いつくしたころ、かの地でひどい飢饉が起こって、彼は困窮し始めた。そこで彼はかの地の住民の一人を頼ると、その人は彼を豚の世話のために農場へと送った。彼は豚どもが食ういなご豆によってでも満腹したいと切望したが、誰も彼には与えなかった。彼は我に返って言った。『どれほど大勢の父の雇い人がパンに飽き足りていることか。しかし私はここで餓えて死にそうだ。起き上って、父のところへ行こう、そして言おう、父よ、天に向かって、またあなたの前で、道を踏み外しました。もはや私はあなたの息子と呼ばれるにふさわしくありません。あなたの雇い人の一人として扱ってください。』彼は起き上ってその父のところへ行行った。しかし彼がまだ遠く離れているうちに、彼の父は彼を見つけ、憐れみ、駆け寄って、その首に飛びつき、口づけした。息子は彼に言った。『父よ、天に向かって、またあなたの前で、道を踏み外しました。もはや私はあなたの息子と呼ばれるにふさわしくありません。』しかし、父親はその召使たちに言った。『急いで一番の晴れ着を持ってきて、彼に着せ、その手に指輪をはめ、その足に履物をはかせよ。上等の子牛をひっぱってきて屠り、そして食べて祝うのだ。なぜならこのわが息子は死んでいたのに再び生きるものとなり、行方不明であっ

たのに見つかったからだ。』そして祝い始めた。

さて、兄息子は農場にいたが、帰ってきて家に近づき、音楽や踊りの音を聞いた。そこで子供を一人呼び寄せ、これはいったい何事かと尋ねた。子供は彼に言った。『あなたの弟がお着きになり、彼を無事で迎えたというので、あなたの父は上等の子牛を屠ったのです。』彼(兄息子)は怒り、家に入ってこなかった。そこでその父は外に出て彼に呼び掛けた。しかし彼はその父に答えて言った。『こんなに長い間あなたに仕え、その言いつけに背いたことなど一度もありません。しかし私のためには一度も、友達と楽しむために子山羊もくれませんでした。それなのにあなたのこの息子があなたの財産を娼婦たちと浪費し、帰ってくると彼に上等の子牛を屠ってやるとは。』彼(父)は彼(兄息子)に言った。「子よ、お前はいつも私とともにいるではないか。そして私のものはすべてお前のものだ。祝い、喜ぶべきではないか、お前のこの弟は死んでいたのに再び生きるものとなり、行方不明であったのに見つかったからだ。』

3. 内容観察

このエピソードは、共観福音書中、ルカにのみ記されている。15章冒頭において、「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た」ことに対しての、ファリサイ派・律法学者たちによる「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」という異議申し立てへの返答としてイエスが語る三つのたとえの三番目であり、最も長いたとえである。羊のたとえ(4~7節)、銀貨のたとえ(8~10節)、放蕩息子のたとえ(11~32節)、これら三つのたとえはいずれも失われたものの再発見というモチーフにおいて共通しているが、これらを組み合わせで一連のたとえ集として記録したのは福音書記者ルカによる編集であると考えられる。

現在われわれが手にしているテキストにおける主題はどこにあるのか、釈義上の意見は分かれている。それは、注解者たちがこの箇所について付している標題に端的に表れている(例として、「『放蕩息子』のたとえ」(三好)³⁾、「愛する父親の譬え」(クラドック)⁴⁾、“The Father and His Two Sons: ‘We Had to Make Merry’”(ノーランド)⁵⁾、「失われた者を探し求める(二人の息子)」(ケアード)⁶⁾)。ただし、これらの意見の相違はいずれも強調点の違いであって、本稿執筆のきっかけとなった、兄息子を正しいとするような解釈類型は研究史上には見当たらない。

このたとえ話の起源について、幾人かの学者はルカによる創作であると主張しているが、多くの学者はルカによる敷衍は認められるものの、核となる伝承があったという立場をとる。

佐竹明はたとえ話の主題や内容的特徴や構造から、伝承は史的イエス自身に遡るとしている。

荒井献は佐竹説と批判的に対話しつつ、(1) 佐竹がこのたとえについて伝承の証左として挙げる特色と構造は、逆に極めてルカ的事であること、(2) たとえ話の機能が「範例」(パラディグマ) 的であるのはヘレニズム世界の特徴であること(事実、放蕩息子のたとえに設定が酷似する物語がヘレニズム著作者である偽クインティリアヌスに見出される)、(3) たとえが示す救済思想が極めてルカ的(悔い改めが救済の倫理的条件)であること、(4) しかし用語法や文体といった言語的特徴においては非ルカ的事であり、ルカ自身の創作とは考えられないことから、いわゆるQ資料あるいはそれ以降の伝承段階に帰されるとしている⁸⁾。そして、三つのたとえをルカは「罪人」の「悔い改め」をモチーフとして編集しているという⁹⁾。

上村静は「罪人の悔い改めというモチーフは、罪人に対する倫理的・宗教的にマイナスの価値付けを前提としており、イエスが恒常的に交わっていた『罪人』とは異なる位相にある」ことや、悔い改めのモチーフはたとえ話の前半部にのみ見られ、後半部には見られない(問題とされない)ことから、元来のたとえに二次的拡張が加わった「弟=悔い改める罪人」・「父=罪人を赦す憐れみ深い神」、「兄=罪人を受け入れられない義人」とする伝承がすでにルカ以前に存在していたとし、ルカは「同様の理解をさらに押し進め、弟息子を異邦人キリスト教改宗者、兄息子をユダヤ教徒と見なしている」¹⁰⁾という。

宮田光雄によれば、福音書成立後の解釈史において、このたとえ話は「古代教会から宗教改革の時代にいたるまで、多くは寓喩的に解釈されて」きたという。テルトゥリアヌス・アンブロシウス・アウグスティヌスら諸教父の間では兄をユダヤ人・弟をキリスト者とする寓喩的解釈が「ほとんど一貫した伝統」であった。宗教改革の時代には、「神の《恩恵のみ》にもとづく罪人の義認という新しい教説を弁明し立証する」物語として、説教のみならず演劇の題材として、このたとえ話はさかんに用いられたという。20世紀にはジイド、リルケ、カフカらが、このたとえ話を題材とし、弟息子に焦点をあて、その内面を深く省察した作品を表している¹¹⁾。

4. 学生による反応

筆者は授業において、この挿話を紹介し、読解を促すために、また学生の反応や読解内容を把握するために以下の方法をとった。

- 1) 当該箇所の素読。〔7分間〕
- 2) 所定の回答用紙(図1)に、共感した点とその理由、および共感できなかった点とその理由を記入。〔10分間〕
- 3) 回答用紙に、当該箇所の主な登場人物である父・兄・弟のうち、上記の作業を通じて最も共感した人物(人物1)、最も共感しなかった人物(人物3)、どちらにもあてはまらない人物(人物2)を記入。〔5分間〕
- 4) 回答用紙に、当該挿話の場面区分を記入。〔5分間〕
- 5) 回答用紙に、各場面における人物1・2・3の言動を想像して記入。〔15分間〕

図1 回答用紙(原寸はA4)

この授業を最初に実施したAクラス(実際の分級名とは異なる)では、授業時間の制約により3)と5)については人物1のみの回答とせざるを得なかった。回答者は主に1年生からなる70名であった。

「最も共感した人物」の答えとして圧倒的に多数であったのは「兄」であった(回答者70名中50名・71.4%)。続いては「父」(13名・18.6%)、最後は「弟」(7名・10.0%)であった。

最も共感した人物として「兄」を挙げたケースの中にも、エピソードの中で「共感した点」は「放蕩していた弟が帰って来たとき、父親がとても喜んだ点」とし、その理由を「どんなに悪いことをしてしまった息子だとしても自分の息子が帰ってきてくれるのは、嬉しいと思う」と父親の想いやふるまいに共感を示しつつも、「共感しなかった点」に「放蕩していた弟に父親が子牛を食べさせた点」を挙げ、理由として「まじめな兄には子山羊一匹すらくれなかったのに、放蕩していた弟に子牛を食べさせるのは、不公平だと思うから」と、そのふるまいの「行きすぎ」

を指摘する意見がみられた。また、共感した点に「兄の意見」を挙げ、その理由を「地道に努力してきたのに父からは何ももらえず、弟は自分の好きなことをして財産を使い果たしたのに父からまたよくしてもらったから」とした学生は、「共感しなかった点」に「父が弟にしたこと」を挙げ、理由として「自分のしたことにはちゃんと責任をとらせなければいけない。財産は二等分してやったんだからそれ以上する必要はない」と述べている。このように、兄の怒りに共感し、弟を「自業自得」、父を「不公平、甘やかしすぎ、理不尽」とする意見が多数派であった。却って、父や弟に共感し、兄の不平に批判的な意見は極めて少数派であった。このことが示すのは、たとえ話伝承の原意・福音書記者ルカが挿話に込めた意図・キリスト教会においてなされてきた解釈と、21世紀の若者が素読を通じてこの挿話に見出す意味との間に著しい乖離が生じているという事態ではないだろうか。

この点について明らかにするために、以下により詳しい分析を試みたい。

回答中、共感できた点として挙げられていた内容を精査し、結果として（１）父の想い、（２）兄の言い分・態度、（３）弟の反省・決心、（４）その他に分類することとした。以下に分類した内容の中からいくつかを、ほぼ回答原文のままに例示したい。

（１）父の想い

・父は弟が帰ってきたので祝宴を開き、喜ぶ点。

（理由）自分のいなくなってしまうていた息子が自分の元に帰ってきたらすごくうれしくて、喜ぶと思うから。このことを自分のまわりの人にも伝えたいと思うから。

・父が祝宴を開いたこと。

（理由）どんな息子であっても、死んだのかもしれないと思っていたのが帰ってきたら嬉しいから。

（２）兄の言い分・態度

・兄が帰ってきた弟に対して祝宴を開こうとしている父に憤慨した点。

（理由）真面目に働いてきた兄よりも弟に重きを置くのは不公平で弟は破門されてもいいと思うほどであったから。

・兄の意見。

（理由）地道に努力してきたのに父からは何ももらえず、弟は自分の好きなことをして財産を使い果たしたのに父からまたよくしてもらったから。兄が怒るのは当たり前。

（３）弟の反省・決心

・お金を無駄遣いしてしまった弟が、飢え死にしそうになって父親のもとに帰ったこと。

(理由) 私もし同じ状況になったら親元へ帰ると思うから。

- ・弟が我に返り、父や点に罪を犯したことを認めた点。

(理由) 反省しているセリフの中で、ただ謝るだけでなく「雇い人の一人にしてください」という反省したうえで、これからどうしていくかという行動が明白だから。

(4) その他

- ・弟の方が分け前をもらい旅に出た点。

(理由) ある程度のお金をもらい、旅に出てみることは様々な経験ができ、良いことだと思うから。

- ・食べ物を与える人はだれもいなかったという点。

(理由) 飢饉によってみんな苦しいので、他の人にあげる余裕がないと思ったから。

回答中、共感できなかった点として挙げられていた内容を精査し、結果として、(1) 弟の身勝手、(2) 父のふるまい、(3) わたしのはお前のものだ、(4) 兄の言い分、(5) 弟は死んでいない、(6) その他に分類することとした。以下に分類した内容の中からいくつかを、ほぼ回答原文のままに例示したい。

(1) 弟の身勝手

- ・お金がなくなったからと帰ってきた弟

(理由) 与えられるのを待っているだけ。反省したようにみせて、今の状態と昔の状態を比べて良い方を選んだだけだから。

- ・弟が「雇い人にして下さい」と父の元へ帰ったこと。

(理由) 自分が無駄遣いしたにもかかわらず、苦しくなると食料もお金にも困らない父の元へ帰ることはずるいと思うから。

(2) 父のふるまい

- ・弟が父親のもとに戻ってきたとき、父親が暖かく迎える点。

(理由) 死んでたと思っていた息子が帰ってきたとしても、財産を使い果たして戻ってきたのに何も言わないのはおかしい。

- ・「祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」という父の言葉。

(理由) いけないことをしたのにどうして祝宴を開くのかよくわからないと思った。

- ・父親の弟と兄に対する行い。

(理由) ずっと一緒にいても、死んでしまっていたと思い生き返ってきたとしても、同じ息子。同じように扱うべきだと思ったから。

(3) わたしのものはお前のものだ

- ・父が、兄に「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」という点。

(理由) 財産を兄と弟に二分している時点で、父が兄に「わたしのものは全部お前のものだ」という理屈に矛盾しているから。

(4) 兄の言い分

- ・兄が父親に対して言ったこと (15:29)

(理由) 父に背かず仕えることが大切だということではないと思う。父に背かないということは自分の意志がないのかと思ったから。

- ・子山羊一匹すらくれなかったことに怒っている点。

(理由) お父さんがどれだけ弟のことを心配していたか分かっていないから。

- ・兄が弟の心配をしなかったこと。

(理由) 自分の弟が生きて帰ってきたのに、兄がそれを喜ばないのが理解できない。

(5) 弟は死んでいない

- ・父が「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った」と兄息子の方に言った点。

(理由) 息子がずっと帰ってこなくて心配する気持ちは分かるが、弟息子は生き返ったとか一言も言っていないし、想像が過ぎると思ったから。

(6) その他

- ・父が兄に伝える間に祝宴を開いたこと。

(理由) 兄の意見も聞くべきだと思うから。

- ・話の終わりかた。

(理由) 「喜ぶのは当たり前ではないか」の後、宴会が終わると父は弟を家から出て行かせました、なら納得。

- ・財産を分ける時期

(理由) 父親が生きている間に財産を分けたことにより、兄弟は自由に使えるお金が増えるが、弟はよくない使い方をして結局父親を頼ることになったから。

以上の項目へと回答を分類した結果は以下のとおりである。回答者は70名であるが、複数回答可としたため、共感できた・できなかった件数の計は回答者の人数計とは異なっている。

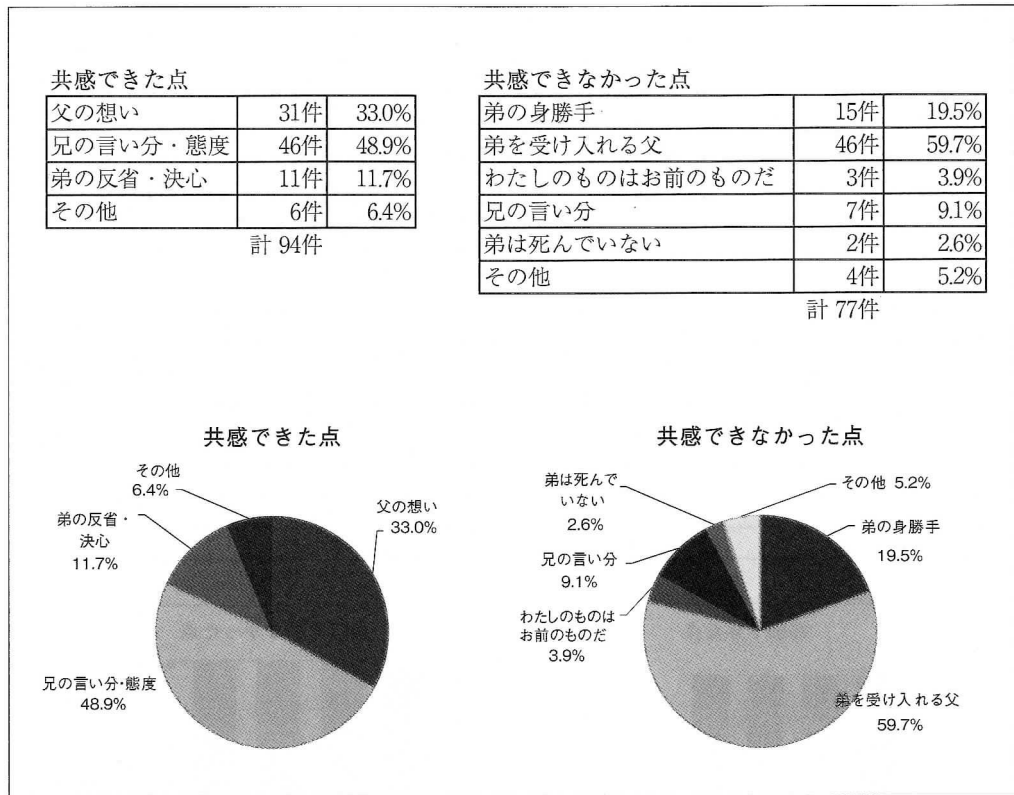


図2 共感できた点・できなかった点 (Aクラス)

この結果から、回答者の多くが、弟を受け入れる父の甘さや、そのことによって生ずる兄への扱いの不公平を問題視しており、そのことに怒る兄の言い分・態度は正当なものであるとみていることがわかる。なお、複数回答者のうち、共感できた点について、「父の想い」と「兄の言い分・態度」の両方を挙げたものが13名(70名中18.6%)いたことから、弟を歓待する父の想いについても一定の理解は示されていることになる。

この結果を受けて、筆者が担当する残り3クラスにも同様の調査を広げた結果を以下に示したい。クラス名はいずれも実際の分級名とは異なる。

共感できた点

	Aクラス(70名)		Bクラス(58名)		Cクラス(93名)		Dクラス(65名)	
父の想い	31件	33.0%	16件	25.0%	41件	24.3%	26件	23.9%
兄の言い分・態度	46件	48.9%	35件	54.7%	71件	42.0%	49件	45.0%
弟の反省・決心	11件	11.7%	13件	20.3%	45件	26.6%	23件	21.1%
その他	6件	6.4%	0件	0.0%	12件	7.1%	11件	10.1%
合計	94件		64件		169件		109件	

共感できなかった点

	Aクラス(70名)		Bクラス(58名)		Cクラス(93名)		Dクラス(65名)	
弟の身勝手	15件	19.5%	9件	14.8%	36件	26.7%	24件	28.2%
弟を受け入れる父	46件	59.7%	29件	47.5%	65件	48.1%	38件	44.7%
わたしのものはお前のものだ	3件	3.9%	5件	8.2%	7件	5.2%	5件	5.9%
兄の言い分	7件	9.1%	4件	6.6%	5件	3.7%	5件	5.9%
弟は死んでいない	2件	2.6%	6件	9.8%	16件	11.9%	8件	9.4%
その他	4件	5.2%	8件	13.1%	6件	4.4%	5件	5.9%
合計	77件		61件		135件		85件	

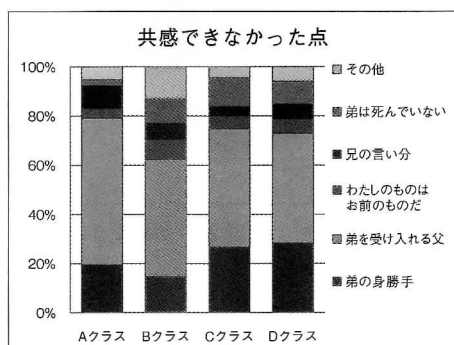
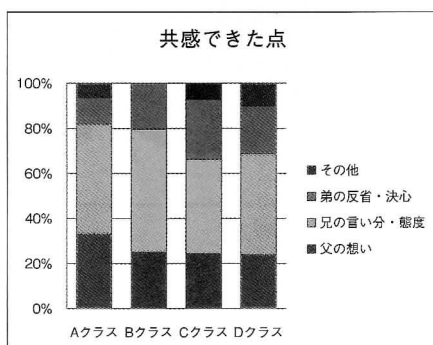


図3 共感できた点・できなかった点 (A～Dクラス)

このように、いずれのクラスにおいても、最も共感を得ているのは兄の言い分・態度であり、その反対に批判的に受け止められているのは、弟の放蕩よりもそれを無条件に受け入れた父の「甘さ」や「不公平」である。

なお、B・C・Dクラスからは、父・兄・弟をそれぞれ最も共感する人物・最も共感しない人物、そのどちらでもない人物として回答した結果を得ているが、当然ながら上記と内容において共通する結果となっている。

	Bクラス (58名)			Cクラス (93名)			Dクラス (65名)		
	最も共感する	中間	最も共感しない	最も共感する	中間	最も共感しない	最も共感する	中間	最も共感しない
父	10 17.2%	14 24.1%	34 58.6%	15 16.1%	26 28.0%	52 55.9%	6 9.2%	27 41.5%	32 49.2%
兄	38 65.5%	12 20.7%	8 13.8%	74 79.6%	15 16.1%	4 4.3%	56 86.2%	8 12.3%	1 1.5%
弟	10 17.2%	32 55.2%	16 27.6%	4 4.3%	52 55.9%	37 39.8%	3 4.6%	30 46.2%	32 49.2%

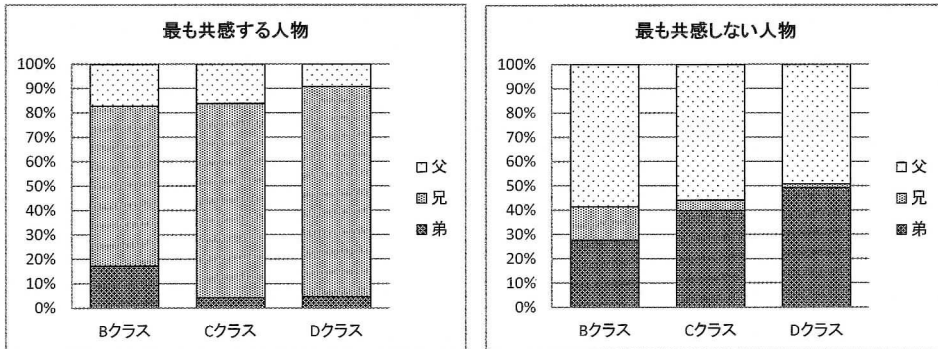


図4 最も共感する人物・しない人物 (B~Dクラス)

この結果の中で、Bクラスでは弟への共感が17.2%と今回の調査の中では際立って高い値を示しており、最も共感しない人物として兄を挙げる割合も、13.8%と今回の調査の中では際立っている。

Dクラスでは兄への共感の割合(86.2%)と弟へ共感しない割合(49.2%)が際立っており、兄を高く評価する一方で弟を低く評価し、また弟を受け入れる父に対しても、他クラスと同様に批判的である(父と弟に共感しない者が同数、兄に共感しないのは1名のみ)。

CクラスはDクラスとグラフはほぼ同形状を示しているが、Dクラスに比べ父への共感もやや多い半面(16.1%=Dクラス比+6.9%)、共感しない割合もやや多い(55.9%=Dクラス比+6.7%)。

このように、クラスごとに読みの傾向に特色がありつつも、全体的な解釈傾向は兄に共感し、父を批判する方向で一致している。

5. まとめ 回答結果から見えるもの（結果を受けての仮説）

物語本来の意図と、学生たちの反応とのこのような乖離について、その理由を以下に考察してみたい。いずれも現時点では判断材料が十分ではないため、仮説の列挙をもって当面のまとめとしたい。

1) 読解者の家庭環境の反映

実生活上の経験や兄弟姉妹関係の影響などが、読解に影響している可能性が考えられる。実際に、回答の中には自分自身の兄弟姉妹関係と比較する記述が、少数ではあるが散見された。

2) 読解力における問題

回答者が物語の表面的要素にからめとられ、たとえ話が内包する意図にたどり着くことができていない可能性が考えられる。たとえば「弟は実際には死んでいないのに、死んだと言う父親はおかしい」といった意見が一定数見られたことから、比喩表現を読み解くことに慣れていないことがうかがわれる。

また、後述の5)にも関連することであるが、単純な正義感に傾いた読みが生じている可能性が考えられる。回答者である学生たちは、物語が読者に投げかける、正義と愛との葛藤¹²⁾に気づき損ねているのではないか。

3) 文脈の度外視

今回はルカ15章の三つのたとえ話のうち、最後の一つのみを読解の対象として取り上げたが、このような取り上げ方が適切ではなかった可能性がある。今回の素読には、授業時間の都合上、場面設定および羊のたとえ、銀貨のたとえを含めなかったが、このことが物語の十分な読解を妨げてしまった可能性がある。

1～3節に記されている場面設定は、ファリサイ派・律法学者の非難に答えてイエスがこれらのたとえ話をはじめたという、読解上のカギを与えているからである。ルカ15章の一連のたとえ話を物語の構造分析という視点から読み解いた三宅光一¹³⁾は、「放蕩息子の譬え」は、たとえの導入部からの強い規定と制約を受けているとし、同様の規定・制約を受けている羊のたとえ(4～7節)、銀貨のたとえ(8～10節)と構造的かつ意味論的に等しく並置されることにより、共通の枠組みがそこにもたらされているという。「放蕩息子の譬え」後半部の未完結性はそれらのたとえの構造・意味に沿って、読者の想像によって補充されるというのである。

4) 設問の問題点

さらに、今回用意した設問や、質問用紙が、学生の反応を読み取るために適切でなかった可能性は排除できない。とくに、学生の中には「共感する人物と、自分が一番似ている人物は異なる」という声もあった。

5) 時代的影響

最後に、筆者がもっとも危惧する仮説を述べたい。荒井献¹⁴⁾は20世紀後半以降の時代を、政治・経済・教育など社会のさまざまな場面において強者が是とされ、弱者が切り捨てられる『『強さ』志向の時代』であると批判している。P. トウルニエもまた、「キリスト教によって表明される人間に対する尊敬、弱い人への保護、慈善と神による救いの必要性を、現代は、国家の崇拜、生存競争の中での弱い人への圧迫、人間の偉大さへの信頼、『進歩と力の梯子を絶え間なく昇ること』で置きかえているのである。(中略)私たちは強い人にへつらい、弱い人をさげすむ間違っただ原理の中に生活している。この原理は、強い人が弱い人に勝つということの中に救いがあるということを信じるように働きかけ」¹⁵⁾していると警鐘を鳴らしている。

回答者である学生たちの読み、すなわち兄息子の正当性への共感と、父親の慈愛に対する辛辣な批判は、このような時代的傾向・影響のもとに生じているということはないだろうか。

しかし、強者のみを是とし、社会的弱者や「常識的」価値観や規範に適合しないものを排除し、さらには排除することによって自らの正義や聖性を弁証する「兄」のようなあり方¹⁶⁾を「正しい」とする姿勢(聖書の場面設定の中では「ファリサイ派」や「律法学者」として表される)をこそ、このたとえ話は批判しているのである。だとすれば、この物語を一読して兄にもっとも共感し、父親が弟を受け入れたことに強い批判を向けた回答者たちにこそ、この物語は向けられているといつてよい。

今回、共感する順序でいえば第一兄―父と答えたある回答者は、共感できなかった点について「兄弟がそれぞれに罪を犯している」ことを挙げ、「弟を批判する兄もまた罪を犯しているのではないか」と述べている。放蕩によって父に背いた弟だけではなく、父の慈愛に冷ややかな視線を向ける兄もまた、父から遠く離れていることをこの回答者は読み取っている。弟だけでなく兄もまた罪人なのであり、すなわち父のゆるしと慈愛の対象なのである。

6. 今後の見通し

本稿においては、ルカによる福音書15章のいわゆる「放蕩息子のたとえ」について、これまでの解釈類型に共通する読みの傾向と、本学学生の回答結果から明らかになった読みの傾向と

の間に明らかに乖離が存在することを示すとともに、その原因についていくつかの仮説を羅列的に提示した。今後の研究においては、「放蕩息子のたとえ」の解釈史・影響史上「兄息子」を支持する解釈類型の有無を明らかにするとともに、より適切な設問を設計して調査の精度を高めつつ、可能な限りにおいて調査の範囲を広げ、今回の回答結果が示すような解釈傾向が生まれる背景について、より詳しい考察を行いたい。

注

- 1) Plummer (1960⁷), p.371。
- 2) 三好 (1991), p.344「このたとえの読者は、解説なしに読む方がたとえの意図する天の父の心を感じとれる」、クラドック (2004), p.310「あらゆる譬えを扱うときと同様に、教師や説教者は、これを説明しようとしないうほうがよい。譬えがそれのみで存在し、聞き手に対し、また聞き手の中で働くようにさせるのだ。説明された譬えというのは、説明された冗談がそうであるように、聞き手の状態を損なってしまうものなのである」、荒井 (2001), p.313「言外に優者（兄）に対して『死んでいたのに生き返った』劣者の受容を勧める語り手の意図が潜在しており、(中略)劣者の放蕩の描写は、この『生き返り』の動機をひきたてるための修辞学的手法とみなさざるをえないのである」。
- 3) 三好, 前掲書, p.344。
- 4) クラドック, 前掲書, p.308。
- 5) Nolland (1993), p.777。
- 6) ケアード (2001), p.217。
- 7) 佐竹明 (1977), p.24-25。
- 8) 荒井, 前掲書, p.316参照。
- 9) 荒井, 前掲書, p.311参照。
- 10) 上村 (2005), p.39参照。
- 11) これら解釈史・影響史は宮田 (1994), pp.18~38より引用。
- 12) クラドック, 前掲書, p.309「寛大さが、正義を廃棄するかのように思われてしまうのである。そして、この譬えは、譬えというもののもつ拘束力によって、読者を、その一寛大さと正義との一緊張関係に引き込んで、それと格闘させるのである」。
- 13) 三宅 (1987), p.34参照。
- 14) 荒井 (2005) 参照。
- 15) P. トウルニエ (1968), pp.180-181。トウルニエはこのように述べるが、確かに人権尊

重や社会的弱者への慈愛は多くの時代・場所においてキリスト教信仰に基づく思想・共同体・信仰者個人の特長でありつづけてきた一方で、信仰や正義の名目のもとに弱者・少数者に対する抑圧や排除を行ってきたのも「キリスト教」(キリスト者)である。

- 16) 宮田, 前掲書, p.13「一度起こったことを昔に戻すことができるということ, 言葉をかえれば, 《赦し》といったものが存在するということ, —それは, 兄が生きている世界には入ってくる余地がないものなのです。父にたいする兄の返答には, 誇り高い自己義認と業績=報酬論がこだましているようです」。

【参考文献】

A.Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. Luke*, T&T Clark, 1960⁷.

J. Nolland, *Luke9:21-18:34* (WBC 35B), Word, 1993.

荒井献『原始キリスト教(荒井献著作集4)』, 岩波書店, 2001年。

荒井献『「強さ」の時代に抗して』, 岩波書店, 2005年。

上村静『イエス一人と神と一』(fad叢書), 関東神学ゼミナール, 2005年。

F. B. クラドック『ルカによる福音書』(現代聖書注解), 宮本あかり訳, 日本基督教団出版局, 2004年。

G. B. ケアード『ルカによる福音書注解』, 藤崎修訳, 教文館, 2001年。

佐竹明『新約聖書の諸問題』, 新教出版社, 1977年。

P. トゥルニエ『強い人と弱い人』, 野辺地正之訳, ヨルダン社, 1968年。

三宅光一「譬え話の構造分析の試み: ルカ福音書15章のテキスト分析」, 『文学研究論集』(筑波大学) 4号, 1987年, 19-36頁。

宮田光雄『新約聖書をよむ「放蕩息子」の精神史』(岩波ブックレット), 岩波書店, 1994年。

三好迪「ルカによる福音書」『新共同訳 新約聖書注解』, 日本基督教団出版局, 1991年。